

## 平城宮中央区朝堂院の調査（平城第 376 次）

今回の調査は、中央区朝堂院の朝庭部分での 2 回目の本格的調査となります。昨冬おこなった平城第 367 次に引き続き、平城第 376 次として、2004 年 10 月 5 日から調査を開始し、12 月 24 日に終了しました。調査面積は約 1,700 m<sup>2</sup>です。

中央区朝堂院は平城宮の中央部に位置し、本調査区は朝庭と呼ばれる広場の中央部東側にあたります。

先の調査ではこの朝庭部分に広がる掘立柱建物群が見つかり、これらが東区の朝堂院朝庭で確認した大嘗宮遺構の一郭とよく似た建物対配置でした。

これにより中央区朝堂院の朝庭においても、天皇が大嘗祭を営んでいたことがはじめて明らかになり、この南側に大嘗宮遺構がさらに広がると予測できました。

このため、今回はこの南側に調査区を設け、大嘗宮東半部の全面的解明を目指すこととしました。

調査では、まず朝庭に広がる小石敷を確認しました。小石の大きさには大小様々あり、小石敷が希薄な場所や後世の耕作により削平された場所などがあつたものの、小石敷が極めて良く残されており、朝庭一面に小石敷が広がっていた状況が想像できます。

この小石敷を部分的に残しつつ、その下層において複数の掘立柱建物の遺構を確認しました。先の調査で確認した建物群に加え、新たに 2 棟の掘立柱建物とこれらを取り囲む柱列を検出したのです。

大嘗宮は東側の悠紀院と西側の主基院からなることが知られており、『儀式』（872～877 年頃成立）の記載から復原できる大嘗宮の建物配置を参考にすると、今回見つかった建物群は、悠紀院の建物群にあてることができます。

これによると、建物を囲む柱列は、悠紀院の北限、東限、南限で、悠紀院の規模は東西 31.2m（105 尺）、南北 43.8m（148 尺）となります。北半部に配した 2 棟の建物は、白屋、膳屋に、やや広い南半部に配した 2 棟の建物は正殿、御厠に推定できます。

これらの建物や柱列の配置の特徴には、側柱列を揃える点があげられ、極めて高い計画性を持った配置を持つことがわかります。

さらに大嘗宮の建物遺構の柱穴からは奈良時代の瓦や磚が出土しました。

最も新しい瓦は 757～767 年（天平宝字～天平神護年間）頃のものであることから、これらの建物は奈良時代後半、第一次大極殿院解体以降のものとしてすることができます。

したがって文献史料の検討とあわせると、今回見つかった大嘗宮遺構は、奈良時代後半で大嘗祭をおこなった場所を『続日本紀』に明記しない 765 年（天平神護元年）の称徳天皇の大嘗祭の時のものであることが確実です。

このように、称徳天皇の大嘗宮の全貌が明らかとなった結果、その規模と構造は東区朝堂院の朝庭で見ついている大嘗宮群とほぼ同一であることがわかりました。

史料から称徳天皇の大嘗祭は僧尼が加わった異例の形式で行われたことが知られていますが、その舞台は決して異例ではなかったようです。

一方、大嘗宮に直接関連しない掘立柱建物群やこれを囲む柱列も検出しました。

柱穴の重複関係から、大嘗宮よりも後の時期の建物であることがわかり、これらの性格や規模は現段階では不明ですが、中央区朝堂院中軸上に位置する特殊な建物群であり、今後その性格を慎重に究めていく必要があります。

本調査では古代の大嘗宮の様相を明らかにするとともに、平城宮の中核部分の利用の実態について新たな課題をもたらした調査として意義づけることができます。

（平城宮跡発掘調査部 清永 洋平）



平城宮中央区朝堂院調査区（北から）